

「謙虚にして剛健」なる科学への志向

アプリカブル・ノーレッジを日びの「生活」に
貢献できる科学と、せんための

*Applicable knowledge that is falsifiable (which in
turn implies a concept of causality) and elegant (that
is, increasing comprehension with decreasing number
of concepts and untestable axioms)* Argyris

大友立也

一

科学で得られた知識を、日びの生活のなかに生かす、日びの生活をヨリ充実したものとすべきことの必要が、社会科学の世界でも、急速にたかまってきた。そして、そのようにしてみると、意外や、科学がいききってきたことが、正しくなかったり、不当であったり、実用に不向きであったり、掘り下げがきいていなかったり、学者側の押しつけであったりなどの例が、いろいろとみえてきた。Everyday lifeの研究と銘打った社会学が、一九六〇

「謙虚にして剛健」なる科学への志向

「謙虚にして剛健」なる科学への志向

年代・七〇年代の交から勃興し、マクス・ウェバーを批判しあるいは再解釈し、パーソンズからも離れて、の業績をみせているのは、単なる個々の調査・研究ではなく学問としての潮流をみせている点での、その顕著な例といえよう。

この「日びの生活」へのヨリ直接的な貢献を意図する動向には、この意図と、始めはほとんど関係のなかった二つの科学的反省がある。ひとつは、科学が客観の上に立たねばならぬとされてきたことへの疑問。もうひとつは、科学がその科学方法をもってきびしくそれを実施したとするとその科学の調査・研究成果は、対象としたこと of the status quo を守ること、に帰結する答えを出してしまい、そこからいかにしても離れられない、ことへの感づき、である。ともに、文化人類学者の失敗と反省が、大きな功献として、その背後にある。哲学的には、フッサール、シュルツ、サルトル、メルロー・ポンティの影響ないし刺激が、これを迫った。

社会学におけるこの動向は、当初、エスノメソドロジイと名乗り、命名者自身その翌年にはネオプラキシオロジイと改称したが前の名がそのまま通用している学派と、かなり初期にこれと袂をわかつたエキジステンシャル・ソシオロジイで代表される。前者の総帥はガーフィンケル、後者のそれはジャック・D・ダグラス。前者の名称を研究社新英和大辞典五版は民族社会学方法論と訳称しているが、この訳出には難がある。命名者自身の「この語の由来」口述によれば、「⁽²⁾それがなんであつてもいい、そのことについてのコモンセンス知識の研究方法学」であることを強調している。「民族科学・民族誌学」のエスノとちがうのである。ガーフィンケルによれば、

「一九四五年シカゴ大学法学部におかれた、⁽³⁾陪審問題研究プロジェクト」に招かれて籍を置くことになり、ここで与えられた仕事は、陪審の進行を別室で「マイク盗聴」し、盗聴したから、すでに知っているその陪審進行

中のことを、陪審終了後、知っているとは思っていない当の陪審員たちに、本人がどのようにそれをいうか聞かねばならぬという仕事で、その盗聴部屋も用意されていた。数カ月これに従事し、教授とその後一年かかつて整理、『陪審員たちは、陪審中の、おのが行動、なにをしていたかを、どの程度知っていたか、どのようにしていたと思っていたか』にまとめ」たが、陪審中陪審員たちは、すこぶる満足して会話をはこんでいたと、これは断定的にこういえるのだが、わたしにも教授にもどうしてもわからなかったのは、なぜ、またどういうことからかれらが陪審員になろうとしたか、なったのか、そのところ、である、という。「この記録を材料に」報告は書いたが、その最中に、わたしの頭の中には『陪審員たちの慎重審議』なるものを分析する気持ちだが、おきてきた、ここからこの学問が始まったのだという。そして「陪審員たち自身は、人と人との集りでは、結果として、ままとまとまとめ仕事というものは、どのような具合にそういう結果にままとまっていくなのか、について、ある種の知識を持っていて、それでやっている——つまりいとも簡単に知識を披歴する、お互いに相手も、自分の知識と同じであるのを、要求する。ひとにそれを要求するのに、その知識を「チェック・アウト」してもらってそれから同意してもらう、を要求しない。このままとめ仕事の最中、まるで陪審員とは思えないまるで陪審員ではない動きなのである」。断固としてはつきりしていることでは「かれらはかれら自身のイメージするところの陪審員ではないまるで科学者みたいに科学者然とやる。そして、やたらと知識を披歴する。ところが知識を披歴してなどいられない、説明する・記述する・立証するのが必要の段になると、あまりはつきりしない「 commonsense でしかない内容」の考えて喋り続け、それでいながら自分としては、「 commonsense 的ではありたくない、いかにも、法的で、ありたいのである」。そういう実際の、実践の思考の、姿をまざまざとみせつけられ、

「謙虚にして剛健」なる科学への志向

「謙虚にして剛健」なる科学への志向

そこから、逆にコモンセンスを貴ぶ、コモンセンスの上ののる科学を、樹立しに、かかる。

エキステンシャル・ソシオロジィの方のダグラスは、社会学を根底から変えようとはしない。ただしは、行意行動をパターンでみることに至極く反対であり、そしてフッサールの現象学特にそのトランセンデンシャル・エゴの理念を超えたところに人間を理解しようとする。この学派もまた個別の人間行動研究に、あるときは一個人を数年にわたり、実際事例を、ときに事前においてまで、本人とディスカスしながら観察する。そして到着したところは、フィーリングをソート(考えられたところのもの、すなわちリーズン、ラァシャナレテイ)、諸価値、したがって本人が本気でコミットしているルール、よりさらに、上位に置くところの社会学体系である。「われわれの生活は複雑にこみいつており、コンフリクトに富んでおり、つねに変化を続けている。なかがあらわれるかを簡単にきめ、きめたところをはこぶというわけにはいかぬそのことは、だれもがみな十分承知できている」。「真実問題の解決は、どんな試みでも、真実についての規準が発見されるそれはどこかどんなときかを決めるところからスタートしなければなら」ず、「存在性と働きの有効性にかけて」「直接体験、非依存独立再テストをする、これがエブリディ・ライヴズの最重要事である」と。

筆者としては、この両派の双方によさがあり、双方の発育を願うこと切である。学問形成の度合はおくとして、これら二派の吟味しおえた業績には、みるべきものが多いのである。その一例をエスノメソドロジストの一人に数えられるイゴン・ビットナーの『ドヤ街警邏』にみよう。毎晩巡回する順路の、とある食料雑貨店の前まで来たとき、二人の警官のうちの一人が、「なんか、おかしい」といい残し、なかにのり込むが、こんなとき店のなかでは、税金計算で夜業、ということもあり、泥棒が犯行中、ということ、あったりする。ところで、

どうして「おかしい」と思ったのかは、なにがそれを自分にそう教えたのか、案外にかれ自身わからなかったりする。しかし、いや応なしに教え込まれた正式規則や法典を守っていたので、という場合はあまりない。むしろ警官のCOMMON SENSE知識によって、インフォームされるのである。その食料雑貨店はいつ表を閉めるのか、どんなとき開いているのか、閉ついてもなかには電気がついているとき、を「知っている」。そういうコンテキストからの理解とCOMMON SENSEからの理解とをつなげていってみるといわれても、それもできない。にもかかわらず、その人の持つそういう知識がその人の行意行動を嚮導するのである。ここにわれわれは仕事における日びの生活をみる。そこにはポランニーのいう tacit knowledge が不可欠に働いているのであり、ブラウン／ジェイクイズのいう ディスクレションがあるのであり、これなくしては、仕事は、運ばないのである。それを、伝統的経営学は、無視していないか、あるいは、その必要を、知つて、知らぬ顔、していないか、すくなくも、「期間判断」の経営学には、これへの関心は、定義によって、みじんもない。

エスノメソドロジイは、伝統的社会学が依存するノームズ、ルールズ、ロールズ、エクステンジンジ等のその学的中心概念を、「日びの生活」理解の場で、ほとんど完膚なきまでに無力化した。エスノメソドロジイのなかでも特殊な存在の一つをなすミハム／ウッドは、右の例で、「警官はルールに従っているなどと、簡単にみるべきではない。He is doing his job.」なのであり、自分の生活をコンストラクトしているのである。……この警官が、新人を仕込む。新人は、警邏巡回はどのようにになるのかをラーンすることになる。教えられたルールのなかのものをどのように用いるかをラーンすることにもなる。しかし最も重要なのは、日びの仕事のなかで、その場に臨んで前に一度も出合ったことのない状況がおきたとき、自分で新しい諸ルールをどうつくりだすかをラ

「謙虚にして剛健」なる科学への志向

ーンすることである」としている。単に規則に従っているだけでは、それは生活ではない。仕事は自分でなすのであり、そのなかで新ルールをつぎからつぎに自分でつくっていくのであり、そうしていくことが生活を構成しているそのことなのである、と。与えられたルールを含め、むしろ自分のつくったルールも、日びの生活のなかでは、停止させること、しばしばなのである。

実世界の日々の生活は、これまで諸もろの社会科学が与えてきた概念のそのままを、無吟味に、持ちこむことのできない世界である。総吟味をかける必要をすら感じるのである。原理・原則の語が、諸学で、急速に、姿を消していったのは、このころ、からでもある。

- (1) 大友立也『行動科学へのちかより』、郵政省人事局、一九七八年、四六一―五二、七六一―七七頁。
- (2) Harold Garfinkel, "The Origins of the Term 'Ethnomethodology,'" *Proceedings of the Purdue Symposium on Ethnomethodology*, Institute for the Study of Social Change, Purdue University, 1968, pp. 5—11; *ibid.*, in Roy Turner (ed.), *Ethnomethodology*, Penguin Modern Sociology Readings, Penguin Education, 1974, pp. 15—18.
- (3) Jack D. Douglas, "Aspects of Existential Sociology," in Douglas and John M. Johnson, *Existential Sociology*, 1977, pp. vii—73; do., *Understanding Everyday Life: Toward the reconstruction of sociological knowledge*, 1970, pp. vii—44; do., "The Impact of the Social Sciences," in J. D. Douglas (ed.), *The Impact of Sociology*, 1970, pp. 250—280.
- (4) Egon Bittner, "The Police on Skid Row," *American Sociological Review*, Vol. 32, 1967, pp. 699—715; J. M. Johnson, "Ethnomethodology and Existential Sociology," in Douglas and Johnson, *ibid.*, p. 170; Hugh

世の中にはまだ、組織を「網の目になった枠」ぐらいにしか考えようとしない学者がいるが、技法の学を考える人か、支配のコントロールを好む人か、社会を扱うにしても社会工学として考えていく人か、に多い。学問のおかれる水準のちがいで、それはそれでよい。われわれは、それを否定しない。学問としての有用性があるからである。とはいえ、われわれもまた否定されることを好まない。われわれは、組織を、社会のインスティテューションとみ、かつ「生きもの」、つまり社会的生きもの、とみる。リーヴゴード(1)の鮮明かつ強靱な宣明をはじめ、多くのマネイジメント関係・アドミニストレーション関係業績の、ボールディング概念への依存は、このみかたの水準の学問が、いまや大勢をなしていることを示す。筆者はこれも、ベルタランファイ、ボールディング、ベルナル、ヘンダーソン、キャノン概念において、かつて、展開してある。(2)一〇年後、これに「生活」の概念を加え、「生きもの体制」であるところの組織の「生活」を「経営」とみる、とした。(3)ふるく経済学に在ったボーイング・コンサーンの観念を展開復活させた思いでも、いる。さらにもう一つ思うことがある。実態観察で驗し確め続けてきたこの一〇年、持ち続けてきた「思想」である。(4)

われわれは、経営学の始祖を、上田貞次郎に、想う。一九〇四年（明治三七年）、『商業大辞典』の「商業学」の項の説明で、工業事業をも劇場、旅館をも、企業としてとらえ、「商業学は宜しく企業の学問たるべき」とした。先学内池廉吉をして「日本に於て企業経営学を唱出したる博士の卓見は歐洲に於ける私経済学の勃興に先ん

「謙虚にして剛健」なる科学への志向

「謙虚にして剛健」なる科学への志向

ずること実に十年」と嘆じさせしめた⁽⁵⁾。「恰も萩、桔梗咲き乱るる秋の野の如く」の句のあることでも有名なこの論文で、経営学は始まった。八年後の明治末年一九一二年の『経済学大辞典』中の同じく「商業学」の項で、「経営」なるものの定義がなされる。経営は企業の本体であって、個々の取引は外部に対する交通関係に過ぎない。企業の内部における永続的なる資本及労働の組織、企業の底にある所の経営つまりこの内部の組織こそこの学問の最も重要な問題なのであり、各種の業務に共通なる経営の原則を発見するに努めるべき、とした。この考えは、終始かわることなく持ち続けられ、晩年の昭和一二年一九三七年の『経営経済学総論』にいたる。ここの主たる主張は、その、「経営経済」なる語への、意味負荷としてあらわれる。惜しむらくは、混迷をさそう表現が残り截然たる指導を後輩に残し得ていない。しかしながら、そこには矛盾はひとかけらもなく、そこ意味された効果は、動かしがたく明白なのであって、この学は、「経営」経済学⁽⁶⁾ではなくして、「経営経済」(それをかれは単位体としての個体経済としてとらえた)学⁽⁶⁾、なのである。

先師上田貞次郎は、その学で、「経営の指導原理は経済の原則」としながらも、「経営の経済性高きことは必ずしも経営そのものの成效と一致しない」とする。「経済性の追求は(経営にとって——大友)技術的の問題だといひ得る」とさえいう⁽⁷⁾。また、「計算的思惟」の伝統を固守する⁽⁸⁾のではなく、すでに独立の専門学として認められている会計学の「技術的部分から解放されて他の方面に発展しなければならぬ⁽⁹⁾」とする。

上田は「経営経済」を「一つの統一したる意思の下に計画的に行はるる経済上の組織である⁽¹⁰⁾」とする。組織なる用語が、現在の社会科学における捉えかたの内容のものと、振幅するが、こういう捉えかたもその文脈のなかではおさまっており納得できる。「経済経済」をそのように「経済組織」とみ、すでに、「社会なる経済組織は、

……自然に発達したものである」ことに認識がひらけているのであるからには、われわれの用法での組織が社会のインスティテューションであることの意味にとらえているそのインスティテューションとしての組織への認識に到達するのには、このあとそう時間はかからなかったのではなからうか。そのうえ、"生きもの体制"としてのとらえ方を知ったら……と、それを思うのである。

いや、実は、上田は、その捉え方を、すでに、している。「経済の原則を指導原理」としながら「経済性高きこと必ずしも成効ならず」としているのがそれである。"生きもの"の生活上の原理原則というものの、捉え方意味を、わきまえていた、といえよう。

人間は呼吸を必須不可欠の本質とする。だがこの必須不可欠の本質を、水中におちたとき、実施しているようでは、人間として失格種である。原理原則あるいはルールの停止のできる能力こそ、"生きもの"のひとつの必須不可欠の本質である。

上田は、「"経営"」と「"事業"」即ち「経営経済」⁽¹¹⁾とを「対照せしめるのである」⁽¹²⁾が、この三者いずれにとっても、「経済性の追求は技術的の問題」⁽¹²⁾（傍点大友）「だといひ得る」⁽¹³⁾（ルビ大友）と、経営経済学は、「経済技術論」に墮してはならぬとした。先師上田は、「経営経済」の学を、しかしながら、終生、経済学のなかに定置させ、本質的にそれは社会経済学であるとし、⁽¹³⁾「大いに拡張して経済組織の学となし得る時」⁽¹⁴⁾（傍点大友）を祈願していた。その「経済学」は、同書で示されたように「広義の経済学」であり、「経世済民」の経済学であり、「経済の原則」あるいは経済性ないしは経済なる価値観のみに固執することをこととする向きの経済学、ではなかった。「実体」ないし「実体論（業務論）」⁽¹⁵⁾ということといい、「実体論と財務論とが相照応して一体となることを必要

「謙虚にして剛健」なる科学への志向

「謙虚にして剛健」なる科学への志向

する」。「実体論の資料は一般経済学の中にある制度、組織、手続の研究から取入れなければならぬ」とした。「(『経営』と対照した意味で)『事業』(そして)即ち『経営経済』」、そして、「業務」、「各種の業務に共通する経営の原則の発見」なる視線は、われわれの「仕事」視座に通じる。「経済性高きこと成效とつながらず」とする上田の「経営経済学」は、「経営」を、「経営という問題は人類生活の永遠の問題⁽¹⁶⁾」と捉える「経世済民」の経済学である。この意味で、明治三七年の「萩、桔梗咲き乱れる」に始まる、その段落の末尾が、「併しながら商業学は実際の必要に応じて発達するのであるから」に始まるセンチンスであり、このセンチンスのいつていること、そして、そのセンチンスならびに段落を納める「学問上の系統を立つるよりも先づ以て内容の豊富になることを望むの外はあるまい」の句は、七八年をへだてて、筆者の胸に温い。「商事慣習」の実務の吸収に始まる淵由の経営学は、実務人の「実践」「実際の必要」から、離れてはならない。実務の世界を知る心を、片ときも、離れてはならない。

(1) B. C. J. Lievegoed, *The Developing Organization, 1973*, esp. Part I: The Importance of Systems Theory for Management.

(2) 大友立也『アージリス研究』、一九六九年、一九七―二二五頁、同『組織政策論』、一九七一年、三一―三三頁。

(3) 大友立也『エフエクティヴネスなる観念(一)』、成城大学『経済研究』、六九号、三六一―三七七頁。「ラーニングの実態と本質(一)——実践科学経営学序説」、一九八〇年、同七一―七九号、三頁。

(4) 前掲『経済研究』七二号抽稿、九―一頁、同六九号、四一頁。

(5) 内池廉吉『商業学概論』、一九二四年、一四頁。坂本藤良「日本における経営学の生成と系譜Ⅱ」、一九五五年『P

R』誌、一一号、四五頁。

- (6) 上田貞次郎『経営経済学総論』、一九三七年、四七―四八、五六頁。
- (7) 前掲書、五六―五七頁。
- (8) 前掲書、三〇、三六、四四頁。
- (9) 前掲書、一六、四四頁。
- (10) 前掲書、一〇、四八、五八頁。
- (11) 前掲書、五六―五七頁。
- (12) 前掲書、五六、一六、五〇頁。
- (13) 前掲書、四〇、四四頁。
- (14) 前掲書、三四頁。
- (15) 前掲書、四四頁。
- (16) 前掲書、八頁。

三

涉獵なお及ばずして、その時期をはっきり区切って明示することはいまのところ筆者にはまだ出来ないが、およそ一九六〇年代のなごころから、米英の社会科学系文献は *social* と *societal* の語を区別して、コンテキストを明確、疑問・抵抗感なしに、みせてくれる傾向があらわれはじめたかに、思う。七〇年代にはいって、かなり鈍重な著者をのぞいて、いっせいにこの、峻別表現の方法をその用語に用いだし、いまでは、(このことに気付いていない読者は別として) 忖度・憶測なしに業績を讀んでいけるほどに、傾向を超え個人の好まないしは習慣の域

「謙虚にして剛健」なる科学への志向

「謙虚にして剛健」なる科学への志向

を出て、慣習化している。

日本では、*social* は、まず、「社会の」と訳され、それ以外の（そしてそれ以外の意味の）語に訳され理解されている例を寡聞にして筆者は承知していないのだが、筆者が、このことに疑問を持ったのは、筆者が学究の道にはいった直後のいまから二〇年ほど前のことになる。「夫婦の間の *social problems*」の語にぶつかって当惑・困惑、そして数日後には、狼狽ろうばいした。この語にぶつかった、はじめは、「夫婦の間に社会問題などあるものか！」と瞬間、拒否した。ややあって、「夫婦の間のことで、当人たちが、あるいはその一方が、社会に（たとえば裁判所に）報告する、社会がそれを問題なりとして受理する」そのようなことの問題をいうのか、と心がやや開けてきて、少し開けてきたからこそ、当惑した。しかし、その文献のそこに登場する問題は、そのような問題ではない。そこで、困惑した。どういうことをこの文章ではいうのだろうか、と、筆者の神経は *problem* のインファスところの方をカングリ続けてしまっていた。わからぬままに何日か経った。たまたまウェブスター・ニュー・インターナショナルをひくときがあって、目的の語を探がす途中 *social* の語の項が目に入った。なんの気なしに目をとめたが、目は釘づけになってしまった。日本語でいう「社会」の意味がそこにはないのである。おそらくたしか、この英語の単語を覚えたのは中学三、四年のころ。以来、「社会の」の訳になんの懸念も持たずに来たが、そこには、その当然としていたものが、極うっすらとしか、ないのである。あわてて、OEDにとび込んだ。あ
のときの狼狽を忘れない。OEDにいたっては、うっすらも、ない、全く、なかったのである。⁽¹⁾

日本でいう「社会の」に最も近い意味は、「of or relating to *human* society : of or relating to the inter-action of the individual, and the group.」（ウェブスターでの意味総五分類中の第四分類）「Pertaining, relating,

or due to, connected with, etc, society as a natural or ordinary condition of human life」(OED) 意味
総一分類中の第七分類)である。(アンダーライン大友) 念のため society の語にあたることもお薦め^すする。ウェ
ブスターにも OED にも、日本語の意味する「社会」の用法の意味は、いっさい、ない。簡単化をおそれずい
うならば英米の society は、人の複数の a collection なのである。

日本語で「社会」ないし「社会の」というときは、「(上部権力機構としての)」の意味が背後にある、あるいは
「(お前を除いての)」「(わたしを除いての)」の意味で使われるザ・エスタブリッシュメントをインファする、い
いかえれば、「はじめに社会ありき」的用法が、一般会話はもちろん学術書においても、一般である。わずかな
例外としては「新聞の社会面」。中学高校の社会科といえは、その教科は地理歴史が主である。

筆者は、この日本における意味の用法を捨てよといっているのではない。捨てよといっても捨てられるもの
はないことを承知している。単元社会を志向した明治以来の国家方向が規制してきたままに残る観念だからであ
る。すくなくも江戸時代中期以降はそうでないものも生れかかってきたかにかが⁽²⁾られるが。⁽³⁾

ザ・パーブリック、ザ・ワールドなる語法がある。しかしこれも日本人のいう「社会」とは、一致するよう
には思えない。向う(米英)には日本人の意識する「社会」なる言葉はなかった。社会科学にとり組む学究として
そのように思⁽⁴⁾う。しかし、ザ・エスタブリッシュメントの観念が、むしろ、向うにイマージしてきて、それをこ
れまでの social 観念とのちがいでみせるときに、そういう意味での上部機構を意味させる語として、societal の
語が用いられ始めたのではないかと考える。折しも、ザ・エスタブリッシュメントの語が多用され始めた、その
時期と、この語法が現れた時期とが、ほぼ一致する。この意味では日本は先進国となった。しかし、その先進国

「謙虚にして剛健」なる科学への志向

「謙虚にして剛健」なる科学への志向

には、social に相当する語は、まだ生れていない。語以前の觀念も生れていない。だから、パーブリック・リスポンジビリティとソーシャル・リスポンジビリティが、官民ともに区別認識されない。すべて「社会責任」である。「社会責任」の内容なるものを大事に認識することなしに、これを論ずる気風であり、なんびともこれに疑問を持たない。あの時期（企業の社会責任が盛んに問われた時期）、多少は、ザ・ソーシャルに、気がつきが始まるかと期待したが、無発に終わった。

上記に、ソサイアティを a collection と書いた。「人」のコレクションと触れた。その人とは、ウェブスター、OEDともに、persons であって individuals ではない。この両語はウェブスター、OEDともに、厳格に区別して用いられている。social の語の全面にかつ前面にあるのは、堂々と person である。これは societal の語が右のように使われ始めてからの語法ではない。OED信頼の拠点の一つ、その史的説明において、語の始まりから、そうである。individuals とは必ず persons というのは、前者を用いて a collection of individuals では言語的にトートロジーを形成してしまってます。An individual は、もうこれ以上分割できぬ存在、の語だから、である。かつて、person は文学が多用し、individual は社会科学が愛用すると説明した学者がいたが、そんなことではないし、そんなことでは解説にならない。筆者は、前者を「当人」（あるいは「本人」）、後者に「個人」の語をあてている。personal は、「当人の」である。personalize は、「当人化する」である。「人間化する」などの語を用いる学者は、いったい、何を意味させようとしているのか、「人間化」とはいったいなのか。「人格化」するなる訳も横行する。まずい訳であると思う。おそらく、問いつめていくと「当人化」になる告白になろう。それなら始めから「当人化」がいい。「当人の考えを生かさせてやる」「当人の行動を、当人が、当

人の意識する環境への、順応アダプト・適応アジャストとして、行えるよう、できるだけ、当人の自由にまかせてやる、当人の自由をゆるしてやる」ことである。ソシアル科学でいうこの語は、十中八九この訳でコンテキストはおさまる。それにしても、「人格化」は、まずい訳であり、「人間化」とは、とんでもない訳である。労働のパーソナライゼーションとは、仕事をなるべく当人たちのやりやすいように、当人がやりたい方法・やりたい順序でやるのをみとめてやるそういうシステム・環境にしてやることであって、「人間化」では、その訳を読む初学の人は到底この意味をつかめまい。訳者自身がわかってないからであり、本気でないからである。どうして本気で、意味内容を考えてみようとならないのか、筆者には解げせない。定訳とされるバーナード三八年著邦訳(新訳)にして然りである。筆者は八年前、バーナード同著の肝心の部分を、「定訳」とは、異ならせて訳出した。⁽⁵⁾そこで意図した異訳の一つが、原文の personal の訳である。筆者はこれを「当人(の)」「当人限りの」「その人が持ちその人が独自に感じる」「その人当人の立場での」と訳した。ところで筆者が畏敬していた「定訳」の訳者の一人、新訳から加わられた山本安次郎教授は、この時期よりあと、「定訳」の「非人格化」を「非個人化」と、自動修正されている。⁽⁶⁾「非個人化」ではありきたり訳で、意に満つるものではないが、「定訳」の「非人格化」よりは、格段とよい。その意味させるところは十分に筆者訳寄りの、趣旨において同質認識への修正で、光栄かつありがたいことになっている。教授は、筆者の右の異訳を十分にご承知であったはず。右のように趣旨において全く同質(ここに「非個人」とは「非当人」ということであろう)の自動修正をされながら、その修正箇所の前頁で、「通常は個人インディヴィデュアルという名詞を一人の人間ワッパイヤの意味に用い、個人的パーソナルという形容詞でその(人間的)特性を強調するものとすれば非常に便利であろう」と(バーナードの原文同教授訳のご自身の自動ご修正とはすこぶる平仄ひよのそくのあわない

「謙虚にして剛健」なる科学への志向

ことにもなることを引用しておられる。なお、バーナードという人のこの原著は、用語の混迷・自分勝手に著しい、妙なレトリックに著者自身が酔い、その混迷を著者自身が逆用する、そういう癖に満ちた著書であるが、その混迷をそのまま日本語に再現するのが翻訳とはいえない。小説類ならいざ知らず、いやしくも学問の書では、原著者に矛盾があれば、その矛盾を衝き、これをすくなくも注記するなどの指摘を怠ってはなるまい。原著者の言辞に酔ってしまい、原著者の言辞に振りまわされてはなるまい。引用されたこの箇所は、バーナードの数多い混迷の顕著な箇所の一つである。ここには同教授訳をそのまま掲げたが、ヨリ正しくは原文は「一人の人間」ではなくて「一人の“人間”」である。こう変えて元に復すとそれだけで、バーナードの臆面のなさが原文からただよい出てこよう。バーナードは、同著の最初の方で、石を思わず蹴ってそれがもとで土砂くずれをひきおこし……の例をもってして、エフィシェンシイ／エフェクティヴネスの弁別認識の要を強調している。そこでの認識はあきらかに「インディヴィデュアルの行為」視考のものではなく「個人当人の行為」視考であり、そこには「その（人間的）特性」などへの還元化ないし水わりの思慮のはいりこむ余地はない。バーナードは、personal, personal を基盤説明では、このように、それが当然のつかい方で使っているのである。「一人の“人間”を「一人の人間」と訳者が原著者をかばいだててして訳書読者の眼をくもらせることも、あるべきことではない。後者ではこのセンテンスに潜む、バーナードの矛盾・不当がみえてこない。「便利であろう」などといわれ、その気になって、ごまかされてはならない。ともあれ、「人格化」訳から離れられたことは、たとえそれが共訳参加以前の旧訳の訳語と同じ語になってしまったという結果であろうとも離れられたその指向方向は、「非当人」を意味する方角であり、この点をもってして、筆者はすこぶるありがたくかつ光栄とし、筆者訳寄りと、感

佩ばのこととして、いるのである。

エスノメソドロジイには、なるほど、エキジステンシャル・ソシオロジイ側の批判するように、学問的体系立てが、新科学として、結実していない。これは、惜しまれるところではある。しかしながら、パースナル水準で捉えようとする努力とその業績は敬意をもってするに値し、これまでの科学では到底さぐりあて得ない、命題もハイポセシイも立て得ない認識を、つきからつきに造出し、しかもこれまでの科学の虚妄きよを衝つき空白を填めつているのは、見事といわねばならない。『生活』の観察は、もともとむずかしい。しばらくは、その事実集めの姿勢に徹して後退のないことを望みたい。

エスノメソドロジストは、「日びの生活」を、なんとかして当人の水準でみようとすること。これに対してエキジステンシャル・ソシオロジストは、「日びの生活」を、パティキュラーの個人のケースを追うことで観察するのでは変わらないが、これを、ザ・ソサイエタルの水準で捉えようとする。すなわち、生活主体であるその個人の体験を抽象化する。すなわち、そのパティキュラーの個人（この段階ではパースナル）を個々人の一人として押え、個人一般のことに抽象化、つまり一般化ジェネライズする。ダグラスはそのようにして、人間の行意行動インテグレーションでは、ソートよりも価値やルールよりも当人のフィードバックが決定的な、行動起動の役割、をはたす、とするエキジステンシャル・ソシオロジイ独特の「フィードバック」なる中心概念を獲える。

いうならば、エスノメソドロジストの方は、「日びの生活」に対処している人間の対処振りをその対処する対象の方を抽象することで学問を立てようとする（パースナルな方は、つまりザ・パースナルは、そのままに残して）。エキジステンシャル・ソシオロジストの方は、対処対象の方ではなく対処主体つまりその人の方を抽象化するこ

「謙虚にして剛建」なる科学への志向

「謙虚にして剛健」なる科学への志向

とで学問を立てようとする（つまりフィリングの概念を得た）。エキジステンシャル・ソシオロジストは、これまでにある、ソシオロジイの、ソシアル・オーダー、ソシアル・ロール等その中心諸概念に破壊・刷新の手を加えることなく、ザ・パースナルのパティキュラー性のなかに一般性を獲得の結果としてザ・インディヴィデュアル視考（大友造語）になるその意味でザ・ソサイエタル水準の——従来の中心諸概念に褫奪をせまるものではないその意味でラディカル改新でない——「日びの生活」ソシオロジイであることを主張する。

エキジステンシャル・ソシオロジイは、man in society を truthfully understand するのだとし、⁽⁷⁾ そうした点でウエバーなども批判しているが、結局は、みずからもみとめるように the total man の研究⁽⁹⁾ になってしま⁽⁸⁾う。直截にその方を志向し「われわれの研究は the world in which we live and create our lives」⁽¹⁰⁾ とする向きもある。

かつて、世の中を救えるのは経済学だけの時代があった。経済学にその自負があったし、世の中もそれを期待した。社会学がそこへ入ってきた。ところが、折から自然科学に「客観万能」^{オブジクティブ・ユニヴァーサル}のそれまでの科学の見方に反省がおきてきた。今世紀なかばには、この反省は圧倒的かつ支配的になってしまった。この考え方は、社会科学からではなく、自然科学の方で産まれた。またしても、社会科学が、それを追うことになる。哲学は、その中間をいく、こと、にならざるを得なかったのか、認識論者が、しかしながら社会科学よりはさきに、自然科学のあとを追う。そうしたなかで、実存主義があらわれる。これを、社会科学は、主観・客観二元論^{デュアルリスム}にとらえ、自分に都合よく、このころまで自分のメソドロジイを守り、かえって殻^かをつくり殻を強化し、コント実証主義を経験主義・方法論主義に展開する安住の地と化す。自然科学の方が、むしろ、かえって、これにおどろく。フッサー

ルのトランセンデンシャル・エゴの概念に觸発された社会科学者が、現象学的・実存主義的、アンチ認識論の潮流にのって、社会科学を前進させるにかかると。その刮目すべき例として、筆者は——実践科学に経営学の意義をみるその実践つまり「生活すなわち理論と実際とのフュージョンの場」視座の主観と客観の相剋の場リアリティ、リアリティのパーソナル把握としてのプロブレム、プロブレム解決の連続としての生活、にみる筆者は——これをエスノメソドロジイの「悪戦苦闘」に、みる。簡潔に、いつてみよう。事件記者が、事件解明の理論を現場のなかにありとするその思いである。主観・客観の問題は、一朝にして解明でき落着ききうる課題ではない。あるいは学問ないし科学のそのものが、コント以前の空にかえったところに、あるいは、あるのかも——ただちにそうは期待するというのではないが——かもしれない。全くちがった方法をとらねば、ソシアルな問題はそしてソサイエタルな問題は、解明していくに、いかな、のかもしれない。そのような思いは、日び、ふくらむ。それでも、なければ、ヨリよきザ・ソシアル、ヨリよきザ・ソサイエタルは、イムプレメンティングどころか期待すらもできないのではあるまいか。経済学はどういう「ヨリよき」国民経済、「ヨリよき」パースナル生活を、考えているのか、「経営経済」学はどういう「ヨリよき」経営を、考えているのか。

筆者は、現在の、科学を学問を、「ふたしかさの軽減」をはかるそのためのもの、とする。その限りのものでしかあり得ないと観念する。その限りでの努力は、しかし、老来、熾烈である。

われわれは、ソシオロジイに、ソサイエタル水準のそれと、ザ・パースナルそのもののソシアル水準のそれとのその両方があっていいと思う。対象抽象・主体抽象と対比させたあの対比から、前者は「日びの生活への嚮導」の提供、後者はそれが出来なくても「日びの生活の（組織体なら、経営すなわち生活の全部を占める）仕事」の設

「謙虚にして剛健」なる科学への志向

「謙虚にして剛健」なる科学への志向

計に役立つ。「日びの生活」にはやはり、主体と客体とのその双方への嚮導が、必要である、からである。

もしそうなら、われわれとしては、「フーリング」を抽出したところとどまらず、エキジステンシャル・ソシオロジイは、もっと鉅を入れてほしい、ことになる。Man is so completely social that even his intense individualism is inspired by his feelings towards other men⁽¹⁷⁾ とした初心を忘れず、みずからどう But we have tried to show that any such ideas of sharedness (or patterns) must be seen in the content of the pluralistic, conflictual, and necessarily problematic nature of our lives⁽¹⁸⁾ を、学問の上で実現して、ついでほしい。

「ソシヤル」とは、当人の、他者ないし他者集合または当人もそのなかに存在する集合への、関係づけをいうのであり、これには、「ピースナル」水準と「ソサイエタル」水準の二つの視座がある。エソノメソドロジイとエキジステンシャル・ソシオロジイとは、かねて筆者のもつこの視考を裏づけ、元気づけてくれた。⁽¹³⁾

- (1) これと同じ経験を、やはりこの当時、これよりややおくれた時期に体験した。「デイスカッションとは、自分の意見で、相手を圧倒屈服させることではない」の句に逢会したときである。これらに似た体験は、この当時以後にわかに多くなつた。それにつけても、この二つの出来ごとと、自分の「内なるもの」が、実は知識の体系が、にわかにかつ急速に、崩壊していくの感で、立ちすくんだ。二度目のデイスカッションの語のときは、「またか!」の意味の方での狼狽でのまいりでひどかつたのだが。当時、ウィルフレッド・ブラウンの「言葉を大事にする」姿勢につらぬかれた組織論・経営観にも逢会。筆者の実践科学経営学は、のちにみられるように、コンセプチュアル・アプローチになるが、その源の一つは、この辺にあるように思う。

(2) 「オープンである、「開放的である、あの人は」というとき、その人はいつたい、どういう人だろう、どういう人をいうのだろうか。これをたずねると、老いも若きも、「家庭の事情など、普通はかくしておきたくなることも、よく語ってくれる人」的答えを、まず、例外なしに、答える。広辞苑をひくと「胸襟を披く」とは「心の中をうちあける」(喋る)ことだといふのであるから、上の例外なしの答えは、とがめだて無用の日本的観念であろう。ところが、英米のオープンとは、「入れるようにする」こと・「なっている」ことである。喋ることではなく、聴くことである。このちがいは大きい、と思う。この日本人が、「オープン・システム(開放体制)」の概念(フォン・ベルタランフイ、ポールディング、ミラー、ラッパポート)を、ジェネラル・システムズ・セオリーを、観念修正なしに、理解できているの、だろうか。広辞苑の説明ではあるが、日本でも、ムカシは、「胸襟を披く」とは、「聴く気になって」の語法で用いられていた。

(3) コミュニティの語も「地域社会」ことに「狭い地域」社会、と一辺倒に訳し・理解しては、まずい。合衆国コミュニティ、英国コミュニティなる語法が、世界や地球を意識してでなく、コミュニティ内部の問題を論じるときに用いられる。この語法の方が一般的である。

(4) 大友立也『企業よあれが社会の灯だ』、昌平社、一九七四年二月、一九四—二〇四頁。

(5) 前掲拙著、昌平社刊、七二頁。

(6) 山本安次郎「有効性と能率との弁証法的関連——バーナード理解深化のために——」、愛知経済大学『アカデミア』、第二〇〇集、一九七四年九月、二五頁。

(7) J. D. Douglas, "Existential Sociology, in Douglas and Johnson, *ibid.*, p. 4.

(8) J. M. Johnson, "Behind the Rational Appearances: Fusion of Thinking and Feeling in Sociological Research," in *ibid.*, p. 227.

「謙虚にして剛健」なる科学への志向

「謙虚にして剛健」なる科学への志向

- (9) Douglas, *ibid.*, in Douglas and Johnson, *ibid.*
 - (10) *Ibid.*, p. 173.
 - (11) J. D. Douglas, “Why a science of society?” in his *The Relevance of Sociology*, 1970, p. 186.
 - (12) Douglas and Johnson, *ibid.*, p. xiv.
 - (13) 「社会的」ということについて若干の意味づけが、村本芳郎教授にある（「ウィスラーにおける制度的接近について」、日本経営学会編『貿易自由化と経営の諸問題』、ダイヤモンド社、一九六二年、一〇二頁）。
- 細部の説明においては、別の説明の仕方になることは、やむを得ないが、本節ならびに本稿全体の「視座」、視考は、内田義彦教授（『作品としての社会科学』、岩波書店、一九八一年）に共感するところが多いといわせていただいでよいように思う。

四

とまれ、実は、エスノメソドロジィにも、エキジステンシャル・ソシオロジィにも、到達予定地^{（1）}は、すでに、おそらく、無意識にであらう、置かれているようである。あるいは、そこへ到達するまでの過程にあらわれることが、かれらには収獲なのであるのかもしれないが、ダグラスは、じょうぶである——we recognize that the truth of any study of the world ultimately depends upon the mind's knowing itself. ^{（1）}カーンメンケルは、じょうぶ——エスノメソドロジィにおおむね、Everyday activities study is directed to the task of learning how members' actual, ordinary activities consist of methods to make practical actions, practical circumstances, common sense knowledge of social structures, and practical sociological reasoning analyzable; and of discovering

the formal properties commonplace, practical common sense actions, "from within" actual settings, as ongoing accomplishments of those settings. 折から哲学界も knowing に関心を集中してきた。たゞえばフューエルマン⁽³⁾である。ダグラスはまたいう——we are concerned here only with practical thought... (that) is directed toward the practical goal of doing things effectively in the social world. それは、われわれがいう「規準としての "エフェクティヴネス" "ラーニング" というところへ帰結することに、なるのではないか。ダグラス、ガーツィンケルに、ともに一か所ではあったが、右のような表出があった。両学派をエンカレッジしたいとしたことは前に述べたが、逆にこのことから筆者が元気づけられたこと多大である。科学としての客観と主観との問題については本稿の始めに述べた通りであり、「あと追ひ」の科学からの脱出⁽⁶⁾についても、本稿ですでに言及したところあつたと思う。

「日常の生活に迫る」ことは、すこぶる困難である。経営の実態については、わが国では、各企業とも閉鎖している（こと、したがってそれに代替する方法を苦肉策として考案したことはほかのところでも述べた⁽⁷⁾）。さらに、実際の生活がみせてもらえてもその「実際の生活の "実態"」をみせてもらえることは、稀有である。

ここに特に「実態」とは、人と人とのインタークションにおけるその人たちそれぞれの肚^{はら}のうち、を含めて、環境からの要請をこめての実態である。また一人のひとの、あきらかに前回とった姿勢態度と（同じ件での）今回とっているそれとの不一致、の込もっている実態である。双方ともに長期の連続観察をし得て、ようやくにして知りうるそのところのことで、そこまで知りうるのでなければ、生活のリアリティを知ったことにはならないところの「実態」である。長期の連続観察がゆるぎされることは、実は、親子・家族の間にも、日常の生活では、ない。組

「謙虚にして剛健」なる科学への志向

「謙虚にして剛健」なる科学への志向

織では、ここに、暗黙の「紳士協定」などのゲームがはいり込んでいる。カモフラージュ、カモフラージュのカモフラージュが、むしろ規範化されて存在する。それらを当該組織の文化のなかで、事件記者的に、文化人類学的に、予定もなしにして（予定すると、既存科学の概念のフィルターでだけしか弁別し得ず、そこで獲られた認識はリアリティを歪曲してしまうことになる）白紙で捉えていき、弁別し、概念する作業が、生活研究リサーチには必要である。トヨタと日産とでは、三越と高島屋とでは、都の上水道局と下水道局とでは、第一勧銀と富士銀とでは、文化は著しくちがう。成蹊と成城とでも、教務部と学生部とでも、ちがうはずであるし、ちがわねばならぬ、のである。であるとすると、そこに存在するカモフラージュにしてもゲームにしても、それを全面的に撤廃させることが、必ずしも、当該組織の生活である経営に、プラスになることには、ならない（永い眼でみても）。しかしながら、そういうカモフラージュやゲームのために、エラーが発生し、発生したエラーが拡大し、またつぎのエラーを産んでいくことも確かである。⁽⁸⁾

ある会議に傍聴を許されテープ録音も許された。そこでの特色のひとつに、「そちらのことは（あなたの守備範囲のことは、あなたのこのことへの意見のよってきたるところの理由・見解、等々は）知らないのですけれど」が連発されて案件が収束されていった特色があった。知らないのなら、聴いてやればよいのに、聞いてもやらないのである。知らないことを武器にしているのである。傍聴者としてはインターヴィューすることもならず、会議が終わってから、個別に、なぜ聞いてやらなかったのか訊ねた。時間がないものだからの答えが返って来た。それなら、どうしてご自分の案件説明等発言はあんなに長いのですか。「案件を十分にわかってもらい正しく知ってもらいたかったからです」の、至極それを当然とする応え。それは担当者として当然というか立派な姿勢、しかし

それにしてもやはり必要でしたか。「いろいろの部や課の、それぞれに疑問や関心のちがう人たちがいるのですから」。そこで当人のテープ録音を聞かせる。ア、エ、ウは免除して、実に実質無駄な発言が多いのである。三〇秒も聞かないうちから、「ああ、これは無駄だったな」の当人の発言が始まり、その連発になる。こうした「教育」で、「(とどのつまりは)自分の防衛機軸の発動がいかに強かったかを知った」を自分から申し出る人が何人もでてくる。相手にはそれがわかっちゃっているのでしょうか、こっちのだらしないことが「にまで気がつく人もでてくる。クリーヴランドのいう「たまたま通りかかった傍観者の審判」⁽⁹⁾が、組織のなかにまで文化化してきているのである。アージリスはこれを「ディスタント知識・ローカル知識」の概念に収め、MISにどうしても内在してしまう大欠陥とし警告を発し続けている⁽¹⁰⁾。

社会科学は、ひとがどう喋るかをまるで社会科学に関係のないかのように扱っているとしてそれに批判を發したのは、エスノメソドロジストとされるサククスである⁽¹¹⁾。以来論争は多々あった。われわれはこれを言語学的にみるつもりはないが、われわれが、実態観察のほとんど唯一のよりどころにしているのは、当人の喋りである。われわれは、「生活」の実態を^{アクション}行行動にみるのであり、アクションをその人の喋りにみる。むしろ、実を伝えない(例えば嘘をいう)等のことは多々ある。ガーフィンケルは、マンハイムの⁽¹²⁾語法による documentary interpretation なる方法をとる。われわれは、アージリスの「行動カテゴリー」⁽¹³⁾を用いる。精密には、発言記録を、発言句ごとにスコアをとるのであるが、実用的にはそれほどの必要はない。この人は自分のアクションをオウンしているかどうか、オープンに相手のいっていることを聴いているかどうか、聴いたところのもの・自分で気がついたところのことを実行するためにみる人かどうか、をみればよい。教育を受けたい、指導を得たいという

「謙虚にして剛健」なる科学への志向

「謙虚にして剛健」なる科学への志向

人には、モデルⅠ・モデルⅡ・モデルⅢ—Ⅰ・モデルⅢ—Ⅱ⁽¹⁴⁾がある。たとえば、モデルⅢ—ⅠのⅢはオーガニゼーションで、その組織に、

情報は流通して自分にも入ってくるのだが、聞くと、つき離された感じになる、前の情報と一貫しない、その人から聞いた前の情報と調和しない情報のやりとり
という文化はあるかないか。

言葉は優しく丁寧、依頼でたのんできても一方的圧力が行使され、発言する方の傾倒信奉する思い、思い込みは、まず崩さない。その主調・解釈の固守に懸命。脅威を感じる問題点はいちはやく回避。とにかくテレストしてみよう、という姿勢はミジンもない（ひそかに独りでやっていることはあるかもしれないが）

という文化はないか。

問題発見——コグニティブマップでいい解決試案の発明創作——その造出実行、と進む複環ラーニング⁽¹⁴⁾への無能、無気つき
が瀰漫^{びまん}してはいないか。

すぐ勝ち負けを意識したがるダイナミックス

ありきたりの毒にも薬にもならない思考・言動の、わがもの顔の横行

協調の美德の名のもとに要求される画一的服従

一味同心の答をトタンに出して全員その気になってしまうグループシンク

の風潮はないか。

問題点を両極でみようとせず、一方の極にのみ追いつめてする、自分の主張に吟味をかけ検討することのない固執

風土はないか。

欺瞞^{ぎまん}まどわしのための処世ゲーム

は行われてないか。

システムはもろいもの、それゆえに滅多なことには手を触れないもの、触れてはならぬもの

とされてないか。

エラーの発見は、脅威

となっていないか。

エラーはカモフラージュせよ

となっていないか。

カモフラージュはカモフラージュせよ

となっていないか。

両方向からの拘束を感じてしまう

空気が淀んでないか。

「謙虚にして剛健」なる科学への志向

「謙虚にして剛健」なる科学への志向

をみればよい。しかしその存在はインターヴェンションニストは指摘しない。メンバーに自分で to be aware させ
る。自分で気がついたところ、自分らで気がついた組織のパソロジイを、どう治療していったらいいのかの方法
も自分らで考えて、原点反省・再出発ラーニング⁽¹⁵⁾を、つきからつきに重ねていく。

「生活」とみただけからには、われわれは、経営はこうあるべきだなどのプロトタイプもアーキタイプも、おこ
とするものではない。とても、そこまで肉迫できるものではない。諸科学を動員していまできるのは、実存的に
世人の眼にみえてきた（上田貞次郎・馬場敬治大先達のころには、先達たちにもみえていなかった社会現象・社会インス
チュレーションの）「組織」を媒介に——組織とあればその本質が肉迫しやすい——「経営」を知ろうとするのであ
る。

どういう経営をいい経営というのか、どういう経営者をいい経営者というのか、どういうリーダーシップをい
いリーダーシップというのか、これまでの経営学は、その他多くのことに答えていない。それでどうしてアプリ
カビリティの高い知識を提供できるというのか。筆者は、筆者にもむろん満足にはできない、そのできないでい
るそのことを、重大に思うからである。

アージリスは、一九八〇年、それまで一九六八年の論文⁽¹⁶⁾以来育ててきた世の社会科学^{リサーチ}研究の基本方法への方法
論的大批判、を展開した。書評はこれを認めざるを得なかった。⁽¹⁷⁾ただしこれは、わが国の経営学界には、及ばな
い。わが国経営学は、そこまで、来ていないから、である。

ありのままの実態を認め、その現在のリアリティから出発する、リアリティのなかにあるパソロジイ（おもて
からはみえないで進行しているちょっとやさそつとで気がつけない病氣）の診断から始める、そのとき既存の概念——こ

の意味で謙虚な、ただし根気よくねばり強くその本質をきわめようとする——その意味で剛健な、謙虚にして剛健な科学たらしめたい。三木清、二四才時の遺稿が死後発見された。いわく『語られざる哲学⁽¹⁸⁾』。そのなかでいう、「素直とは謙虚にして剛健なるの謂^いである」と。
(19)

斎藤先生は、筆者の敬愛する日銀時代の課長渡辺孝友（前輸銀総裁）と安定本部で机が隣りあわせだったといわれた。ごきょうだいが支店にいなさるともいわれた。初めて話らしい話をしたのは、一一年前筆者が本学に就任してから一年ほどあつたと思う。生物の持つアダプトとアダプタの機能のちがいについて、語りあつた。ご専門の経済学書ばかりでなくいろいろの学問のご蘊蓄が深かつた。いつもそう長時間ではなかつたが、ご病気がちになる前は、お話できて、おかげで教えられるところ多く、また、ご不用になつたと外書を頂戴したこともある。かつて学生部長であられたときは、ちょうどむずかしい時期でご苦勞も多かつたろうと思うのだが、そうした話はいっさいなさらず、逢えば、学問の基本的なことばかりが話題になつた。思えばそうした話をして下さる数少い先輩だつた。学部四年になつてから筆者のゼミに移りたいと申し出た学生をころよく移籍させそのあとともにくれとなく面倒をみて下さつた。筆者がゼミでニスベットの講読を全員に実施していたとき、かげでその本はいい本だと筆者のゼミの学生を激励して下さつていたことを、学生たちから、あとになって聞いた。京都大学をこよなく愛しておられ、京都大学を語るときは、澄んだ澄んだ顔をなされた。話の最中、意見があわないと、不快をかくされず、話がはずんだ。話せば、学問を育てることの話ばかりだつた。本稿に書いたことの大部分は、そのとき、話題になつたことである。その後わたしの考えがどうなつたかをこめて、ご靈前にささ

「謙虚にして剛健」なる科学への志向

「謙虚として剛健」なる科学への志向

げん。

- (1) Douglas, "Introduction" to Douglas and Johnson, *ibid.*, p. xi.
- (2) Garfinkel, *ibid.*, pp. vii—viii.
- (3) James K. Feibleman, *Adaptive Knowing: Epistemology from a Realistic Standpoint*, 1976.
- (4) Libuse Lukas Miller, *Knowing, Doing, and Surviving Cognition in Evolution*, 1973.
- (5) Douglas, *ibid.*, p. 69.
- (6) 前掲『経済研究』拙稿二稿。
- (7) 『経済研究』六九号、三五頁。西部邁「現代をどうとらえるか」朝日新聞、一九八二年一月二二日夕刊。
大友立也訳ボークスロー『システムの生態——組織・社会の哲学』（原題名 *The New Utopians*, 1965）ダイヤモンド社、一九七二年、四頁。
- (8) 『経済研究』七二号、九一—〇頁。大友立也『経営学は、この現実をどうみるのか』成城大学経済学部創立三十周年記念論文集、一九八〇年、四〇〇—四〇四頁。
- (9) Karl R. Popper, *Objective Knowledge: An Evolutionary Approach*, 1972, pp. 165ff.
- (10) 大友立也訳クリウランズ『これからの組織——これからのリーダーシップ』日本経営出版会、一九七四年、三二頁。
- (11) C. Argyris, "Organizational Learning and Management Information Systems," *Accounting, Organizations and Society*, Vol. 2, No. 2, 1977; do., "Some Inner Contradictions in Management Information Systems," mimeographed, Harvard University, June 1979;
- (12) Harvey Sacks, "Sociological Description," *Berkeley Journal of Sociology*, Vol. 8, No. 1, 1963, p. 1—17.

- (12) Karl Mannheim, *Ideology and Utopia*, 1936.
- (13) 大友立也「リーフ・ファイ能力なる認識(一)」、『成城大学『経済研究』、一九八二年一月、七六号、三二頁。
- (14) 大友立也訳アーギリス『組織における長たるもののラーニング』、成城大学大友研究室、一九七八年。一部紹介、大友立也「教育に、新しい視座」、成城学園『成城教育』、一九七七年、一八号。
- (15) 大友立也「ラーニングの実態と本質(二)」、『成城大学『経済研究』七四号、一九八一年七月、一五頁の「原点反省」再出発ラーニング」の一文。
- (16) C. Argyris, "Some unintended consequences of rigorous research," *Psychological Bulletin*, Vol. 70, No. 3, 1968, pp. 185—197.
- Do., "The incompleteness of social psychological theory," *American Psychologist*, Vol. 24, No. 10, 1969, pp. 893—907.
- Do., *The Applicability of Organizational Sociology*, 1972.
- Do., "Dangers in applying results from experimental social psychology," *American Psychologist*, Vol. 30, No. 4, 1975, pp. 469—485.
- (17) Chris McGivern, "Book Review on C. Argyris, *Inner Contradictions of Rigorous Research* (1980)," *Journal of Management Studies*, Vol. 18, No. 4, 1981, pp. 435—439.
- (18) 『三木清全集第一巻』、岩波書店、一九四六年。
- (19) ライフ・サイエンスは、遺伝子工学等の産業化など衆目をあつめる事態があるためか、新聞などでは「生命科学」と訳されていて、うたがわれない。筆者は、ここに「ライフ」とは「生活」あるいは「人生」も意味されていると確信する。その簡単な挙証は、一九六二年の「アメリカ大統領の学術科学諮問委員会ライフ・サイエンス委員団の「謙虚にして剛健」なる科学への志向

「謙虚にして剛健」なる科学への志向

大統領への進言内容である。個条書き式要約であるが、前掲拙著、一九七八年刊、にその内容を提示しておいた。生命科学がはいってむろんかまわないが、生命科学だけではない。生活科学は歴然とこの委員会上申に、はいって大きな比重をしめしている。「生活」科学、それは、もう始まっている。